平成２４年度新風会行政視察報告書

１．視察期間

平成２４年１０月３０日（火）

２．視察先

宮城県南三陸町

３．視察項目

がれき処理について

４．視察の目的

東日本大震災による南三陸町のがれき処理の状況について調査するとともに、復興に向けての課題について調査研究し、高山市の災害対策にその教訓を活かすため。

５．視察内容

ア．概要

震災から約１年半を経て、現在の被災地の状況を視察した。メディアを通じ垣間見る状況とは格段の差がある。現在３年間の期限付きで年間１５０億円の予算により、大手ゼネコンが大がかりなプラントを設置し処分が行われていた。

しかし、そのがれきの多さに圧倒され、被災地の痛みを共感した。そのような中にあって、町の担当者は「がれきの処理については、１００％当地で処分することとした。処分を断る他の自治体の立場も分かるので無理は言えない。」と話されたことが胸に突き刺さった。

イ．効果

千年に一度といわれる被災地の状況を政治に携わる者として、目に焼き付けたことは貴重な経験となった。また、高山市の災害対策の在り方についても大きな示唆になった。また、がれき処理の受け入れについては、現地を見た上で、当市として判断していくという点で尊い情報となった。

ウ．課題

がれき処理プラントにより、リサイクル率は 98.8％であるが、残りの 1.2％の焼却灰は埋め立て処分が必要であり、その受け入れ先がまだ決まっていない。また、約 1mの地盤沈下もあり、津波対策を考えると、これまで町の中心街であった平地には町の再建は困難である。国の補助制度は高台移転を対象としていないなど大きな課題が山済みだ。更に、復興計画が遅延する中で、地域住民のコミュニティが裂かれていくなど、復興の希望は見えていない。

６．考察

テレビや新聞で幾度となく見ていた光景も、自分がその場に立って、被災地の風景と空気に触れた時、議員全員が言葉をなくし、冥福を祈るしかなかった。南三陸町の担当職員が、夜になって続々避難所に詰めかける群衆をみて「こんなにも、多くの人が生き残ってくれたと思った。」と話された言葉の中に、津波がいかにすさましいものであったかが改めて分かった。

がれき処理は復興への第一歩であるが、それさえも自力でしなくてはいけない厳しさがある。高台移転にも国の理解が得られない。我々は、真実を知り被災地のために何ができるのか。元気な日本を取り戻すために何ができるのかを問い続けることになるのだろうと思う。

また、高山市の災害対策の中で、

◎初動体制の整備の必要性（要援護者台帳の整備等）

◎議会版 BCP（業務継続計画）の必要性。

これらの重要性について認識するとともに市の対応を調査する必要がある。

平成２４年度新風会行政視察報告書

１．視察期間

平成２４年１０月３１日（水）

２．視察先

秋田県仙北市

３．視察項目

・歴史的町並み保存について　・温泉を活用した観光施策について

４．視察の目的

高山市と類似した古い町並みと温泉郷を所有する観光都市を調査研究し、高山市の観光振興施策に活かすため。

５．視察内容

ア．概要

全国で最初の重要伝統的建造物群保存地域に選定され多くの観光客が訪れる武家屋敷、どの様な保存と活用をされているのか、今後の取り組みなどを観光商工部観光課の考えと、保存を進める教育委員会文化財課の考えを聞いた。また、全国的に有名な玉川、乳頭などの温泉郷との観光施策についても聞いた。仙北市では観光産業を活かして北東北の交流拠点都市を目指し、平成２７年に１０００万人観光客数を目指すテンミリオン計画（観光客数値目標）を明確に掲げ、多くの観光施策を講じていた。

イ．効果

四季を通じて訪れる人々を心豊かにする魅力的なところであり、ここに住む人々が脈々と築いてきた「ここでなければならない」「ここにしかない」固有の歴史と文化が根付いていて、その特性を活かし、この地域に住む人たちの一人一人の心がけで旅行客にやさしい観光地作りに取り組まれていた。

ウ．課題

①冬季観光客が少ない。

１２月から２月にかけての冬季に訪れる観光客は１０％にも満たない。

②観光地間のアクセスが不十分。

市内の観光地から観光地への移動に要するアクセスは充分とはいえない状況。

③情報発信の不足。

仙北市の魅力が適切、正確に相手方へ伝わっていない状況。

④受け入れ態勢が不十分

おもてなしの意識の高揚を図り、観光客が楽しいひとときを過ごすことが出来るよう努める必要がある。

⑤日帰り、通過型の増加傾向

ここ数年宿泊客は減少しており、日帰り、通過型観光が増加傾向にある。

⑥国際観光の推進

外国人観光客に対する案内機能や施設の受け入れ体勢は必ずしも十分ではない。

６．考察

武家屋敷が連なった町並みは当時のまま保存されていることは、全国的にも貴重であり素晴らしいものである。高山市でも大きく見習う必要がある

高山市でも文化財の保存と町並景観等については、先人たちが守り継承してきており、今後も次世代へ行政と民間が一体となって継承していくことが、我々の責務である。

角館へも「桜まつり」に春の観光客が、平成１２年度から毎年１１０万人から１５０万人余りが訪れていることを思うと、高山市でも中心地を流れる宮川､江名子川沿いや河川敷にある公園（七日町･大新町など）、及び支所地域にも歴史的に見ごたえのある桜が多くあるので、桜をテーマにして市全域での誘客に取り組みを図る必要がある。（現在も誘客活動はパンフレット等を見ると、全ての催し物等と一緒に掲載されているため見逃しやすい。）

高山市でも､訪れて下さる観光客に心からのおもてなしができるよう、今一度、観光振興策のすべてを見直し、新たな観光振興ビジョンを明示すべきと考える。